

共産主義における「左翼」小児病

・ 他十一篇

レーニン 著
朝野勉 訳
川内唯彦



大月書店

国 民 文 庫

105

(改訂版)

共産主義における「左翼」小児病

レーニン 著

朝野 勉 訳

大 月 書 店

共産主義における「左翼」小児病

一九五三年二月十五日 初版発行
一九五七年三月一日 改訂再版発行

定価 八〇円



訳者 朝野勉

発行者 小林直衛

印刷者 山元正宜

発行所

東京都文京区
本郷一ノ十五
株式会社

大月書店

電話 小石川(92)三〇九一
振替 東京一〇三八六五番

凡 例

一 本訳書は、ソ同盟共産党（ボリシェヴィキ）中央委員会付属マルクス・エンゲルス・レーニン研究所編集の『レーニン全集』第四版第三十一巻所収 *Детская болезнь «левизны» в коммунизме* の全訳である。

一、レーニンの原注は*印を付して各パラグラフの直後につけ、訳者のつけた事項訳注は（１）（２）……でしめし、人名訳注は「アイウエオ」順に排列して、ともに一括して巻末にかかげておいた。なお、文中「」内の、六号活字のものも、簡単な訳注または訳者の補足である。したがって、本文中（ ）内の字句はすべて原著書の挿入句である。

一 原文のイタリック体の箇所は訳文ではゴシック体にし、隔字体の箇所は傍点をふってこれをしめた。ただし、見出しのところは、かならずしもこの方針にはよらなかった。

一 本文中「」は引用文その他、『』は引用文中の再引用箇所ならびに著書、新聞、雑誌その他の書誌名または著作題名をしめすのにもちいた。

一 地名、人名はなるべく現地の発音に近く表記することを原則としたが、従来の慣用をも考慮した。

一 邦訳の参照は、マルクスとエンゲルスについては、とくにことわってないばあいには、『マルクス・エンゲルス選集』（大月書店版）の巻数およびページ数のことである。

目 次

共產主義における「左翼」小児病

一	どのような意味でロシア革命の国際的意義をかたることができるのか？	五
二	ポリシエヴィキが成功した一つの重要な条件	九
三	ポリシエヴィズムの歴史のおもな段階	一三
四	ポリシエヴィズムは労働運動内部のどのような敵との 闘争のなかで、成長し、つよくなり、きたえられたか？	二二
五	ドイツの「左翼」共產主義。指導者—党—階級—大衆	三三
六	革命家は反動的な労働組合のなかではたらくべきか？	四四
七	ブルジョア議会に参加すべきか？	五八
八	妥協は絶対にいけないか？	七四
九	イギリスの「左翼」共產主義	九〇
一〇	二、三の結論	一〇〇
追 加		一三三

一	ドイツ共産主義者の分裂	一三三
二	ドイツの共産主義者と独立派	一三五
三	イタリアのトゥラティ派	一三九
四	ただししい前提からひきだされたまちがった結論	一四一
五		一四八
	ヴァインコプの手紙	一四八

解 説	一五一
-----	-----

人名訳注	巻末 1
事項訳注	巻末 10

共產主義における「左翼」小児病⁽¹⁾

一 どのような意味でロシア革命の国際的意義をかたることができるのか？

ロシアでプロレタリアートが政治権力をとったのち（一九一七年十月二十五日——「新暦」十一月七日）、最初の数ヵ月間は、おくれたロシアとすんだ西ヨーロッパ諸国とのあいだに非常な違いがあるため、これら西ヨーロッパ諸国のプロレタリア革命はわが国の革命とは似たところのきわめてすくないものとなるであろうと考えられもした。いまでは、われわれはすでに非常にりっぱな国際的経験をつんでおり、これらの経験は、われわれの革命の若干の根本的な特質が、たんに地方的な、民族に特有な、ロシアかぎりの意義をもっているのではなくて、国際的な意義をもっているということをきわめてはっきりとものがたっている。ところがわが革命の国際的意義とは、われわれの革命があらゆる国に影響するという意味であるが、私はここで国際的意義をもつというのは、このことばの広い意味で言っているのではない。つまり、わが革命の若干の特

質がではなく、すべての根本的な特質や多くの第二義的な特質までも、すべて国際的意義をもつと言っているのではない。そうではなくて、ことばのもっとも狭い意味で言っているのである。すなわち国際的意義ということばを、わが国でおこったことが国際的な意味をもつ、あるいは、それが世界的な規模で歴史的にならざるうにかえされるというふうに理解する場合、このような国際的意義は、われわれの革命の根本的特質の二、三のものについてみとめなければならないというのである。

もちろん、この真理を大きく見すぎて、それをわれわれの革命の根本的な特質のうちの若干のもの以外に拡大することは、もっとも大きなまちがいであろう。またどこかのすんだ国でプロレタリア革命が勝利したのちは、おそらくはまちがいなく急激な転換がやってきて、この急転のち、ロシアはまもなく模範的な国ではなくなり、ふたたびおくれた国（「ソヴェト」国家としても、また社会主義国家としても）となるであろう。この点を見おとすことは、やはりまちがいであろう。

だが、現在の歴史的瞬間では、事情はまさにつぎのとおりである。すなわち、ロシアの手本はすべての国にたいし、これらの国が避けることのできない、しかも近い将来にあらわれる事からのうちの、きわめて本質的なものかを、しめしているということである。すべての国の進歩的な労働者たちはずっとまえからこのことを知っていた、——知っていたというよりは、むしろ多くのばあいには、革命的な階級の本能によって、これをつかみ、これを感じていたのである。こ

こから、ソヴェト権力の国際的な「意義」(狭い意味で)、またボリシェヴィキの理論と戦術の基礎がうまれるのである。このことがドイツのカウツキー、オーストリアのオット・バウアーやフリードリヒ・アドラーのような第二インターナショナルの「革命的」指導者にはわかっていなかった。だからこそ、彼らは、反動家であり、もともと悪質な日和見主義や裏切り社会主義の擁護者であったのである。なかでも、一九一九年にウィーンで出た匿名のパンフレット『世界革命』(„Weltrevolution“) (社会主義文庫、第一一冊、イグナツ版) は、彼らの思想のあらゆる筋道、その思想の全体の範囲、もっとただしくいうと、底のしれないあさはかさ、学者ぶった態度、卑劣さ、労働者階級の利益にたいする裏切り——それも「世界革命」思想の「擁護」といったお化粧をしている——をとくにはつきりとしめしている。

だが、このパンフレットについては、いつか別な機会にもっとくわしく論じなければならない。ここでは、もう一つのことにあふれるだけにしよう。ずっと昔、カウツキーがまたマルクス主義者であつて、裏切者でなかったころ、彼は歴史家として問題をとりあげ、ロシア・プロレタリアートの革命性が西ヨーロッパの手法となるような情勢がやってくるであろう、と予言した。それは、カウツキーが革命的な『イスクラ』に論文『スラブ人と革命』を書いた一九〇二年のことであつた。彼はこの論文のなかでつぎのように書いている。

「現在では(一八四八年とは反対に) スラヴ人たちが革命的国民の列にはいったばかりでなく、革命的な思想と革命的な事業の重心がますますスラヴ人のほうにうつりつつあると考

えられる。革命の中心は西から東にうつっている。一九世紀の前半に、それはフランスに、ときにはイギリスにあった。一八四八年にはドイツも革命的な国民の列にはいった。……新世紀の始まりとともに起こったいろいろな事件は、革命の中心がさらに移動しており、とくにロシアへと移動しているという考えをわれわれにいだかせた。……西ヨーロッパからあれほどの革命的イニシアティヴをうけついでロシアは、いまではおそらく、西ヨーロッパにあって革命的なエネルギーのみなもとになることができるであろう。燃えあがるロシア革命運動は、おそらくはわれわれの内部にひろがりはじめているあのひからびた俗物主義と、気のぬけた政治取引の精神を追いはらう、もっとも強力な手段となり、また闘争の意欲とわれわれの偉大な理想にたいする情熱にみちた献身をふたたび炎のように燃えあがらせてくれるであろう。ロシアはもうずっとまえから、西ヨーロッパにたいする反動と絶対主義のたんなるとりでではなくなっている。おそらく今日では、事情は正反対である。つまり、西ヨーロッパがロシアにおける反動と絶対主義のとりでになっっている。……ロシアの革命家たちはツァーリの同盟者——ヨーロッパの資本にたいしても同時にたたかわなければならぬという事情がなかったなら、おそらくずっと以前にツァーリを処分してしまったことだろう。こんどこそは彼らがこれら二つの敵を処分し、新しい「神聖同盟」⁽²⁾がその先輩よりもはやくたおれるであろう、とわれわれは期待したい。ロシアの現在の闘争がどのような形でおわるうと、その闘争が残念ながらあまりにも多くの殉教者をうむであろうが、彼らの血と苦しみ⁽³⁾はむだ

にはならないであろう。それらのものは、あらゆる文明世界のなかで社会変革の芽をそだて、それをしげらせ、すみやかに成長させるであろう。一八四八年には、スラヴ人たちは人民の春の花を凍らせる厳寒であつた。おそらく、いまや彼らは、反動の氷をうちくだき、どんなことをしても人民のための新しい幸福な春をもたらす嵐となる運命をせおっているであろう。』（K・カウツキー『スラヴ人と革命』、『イスクラ』第一八号、一九〇二年三月十日）

一八年前のカール・カウツキーはりっぱなことを書いたものだ。

二 ポリシエヴィキが成功した一つの重要な條件

おそらく、いまではほとんどだれでも知っているように、わが党にもっとも厳しい、真に鉄の規律がなかったならば、労働者階級の全大衆、すなわち労働者階級のなかで分別があり、誠実で、献身的で、影響力があつて、おくれた層をみちびいたり、ひきついたりすることのできる、すべての人が、党を完全に献身的に支持しなかったならば、ポリシエヴィキはこの二カ年半はおろか二カ月半も権力をもちこたえられなかったであろう。

プロレタリアートの独裁は、新しい階級がより強力な敵にたいし、うちたおされたためにその反抗が数倍にもなったブルジョアジーにたいしておこなり、もっとも献身的でもっとも無慈悲な戦争である。このブルジョアジーの抵抗はその転覆（たとえ一国だけにしても）によって十倍と

なる。そして、ブルジョアジーの力は、國際資本の力、ブルジョアジーの國際的連繫の力の強固なことだけあるものではなくて、それは習慣の力のうちに、小生産の力のうちにもある。なぜなら、小生産は、こまつたことに、まだこの世界にきわめてたくさんのおこっており、この小生産は資本主義とブルジョアジーとを、たえず、毎日、毎時間、自然発生的に、しかも大量にうみだしているからである。これらいつさいの理由からプロタレリアートの独裁が必要になつてくるのであり、ブルジョアジーにたいする勝利は、長い、ねばりずよい、猛烈な、死物ぐるいの戦いなしには不可能であり、この戦いは、忍耐、規律、剛毅、不屈、意志の統一を要求するのである。くりかえしていうと、ロシアにおけるプロレタリアート独裁の勝利の経験は、右の問題を考へることのできない人たち、あるいはそれをふかく考へることのなかった人たちにたいし、プロレタリアートの無条件な中央集権をもつとも厳格な規律こそがブルジョアジーに勝つための根本条件の一つであるということをはっきりしめした。

この点は、よく問題にされる。だが、これがなにを意味するのか、どのような条件のもとでそれができるのか、といった点に坎する検討は、きわめて不十分である。ソヴェト権力とボリシエヴィキに称讃のさけびをおくるだけではなく、同時になぜボリシエヴィキが革命的プロレタリアートにとつて欠くことのできない規律をつくりだすことができたかという原因について、もっとも真剣な分析をもつとしばしばおこなうべきではないだらうか？

ボリシエヴィズムは、政治思想の一潮流として、また政党として、一九〇三年このかた存在し

ている。ポリシエヴィズムが存在してきた全期間の歴史だけが、なぜポリシエヴィズムがプロレタリアートの勝利に欠くことのできない鉄の規律をこのうえなく困難な条件のもとでつくりだし、それを維持することができたかを、満足のゆくように説明することができ。

それで、まず、つぎの問題がおこる。すなわち、プロレタリアートの革命党の規律はなにによってたもたれるのか？ それはなにによって点検されたのか？ なにによってうちかためられるのか？ それは、第一に、プロレタリア前衛の意識、革命にたいする献身、その忍耐、自己犠牲、英雄主義によってである。第二に、彼がきわめて広範な勤労者の大衆、まず第一にプロレタリア的勤労大衆と、だがまた**非プロレタリア的勤労大衆**ともむすびつき、彼らに接近し、必要とあればある程度まで彼らとけあう能力によってである。第三に、これらの前衛がおこなう政治的指導のただしさによって、彼らの政治的戦略と戦術のただしさによってである、——ただし、これはもつとも広い大衆が自分の経験にもとずいて指導のただしさを納得するという条件のもとである。これらの諸条件がないと、実際に、ブルジョアジーをたおし、全社会を改造しなければならぬ先進的階級の党たるにふさわしい革命的党の規律は、実現できないのである。これらの条件がないと、規律をつくりだそうという試みは、不可避的に、つまらぬものに、無意味な文句に、道化にかわつてしまう。だが、他方からいうと、これらの条件は、一挙に発生するわけにもゆかない。それらは、長いあいだの労苦によって、苦しい経験によつてはじめてつくりあげられるのである。これらの諸条件をつくりだすのを容易にするものはただし革命理論であつて、この理

論はまた教条ではなく、真に大衆的な、また真に革命的な運動の実践と密接にむすびついてはじめて最後のにつくりあげられるものである。

ボリシェヴィズムは一九一七—一九二〇年に、これまで見たことのないような困難な諸条件のもとで、もつとも厳格な中央集権と鉄の規律をつくりあげ、それを首尾よく実現することができたのであるが、その原因は、ひとえにロシアの多くの歴史的特殊性のなかにふくまれるものであった。

一面から見ると、ボリシェヴィズムは、一九〇三年に、マルクス主義理論のもつとも堅固な土台のうえにうまれた。この——しかもこれのみ——革命理論のたゞしさを証明したものは、一九世紀全体の世界的な経験だけではなく、とくに、ロシアの革命思想の彷徨と動揺、誤りと失望の経験であった。約半世紀にわたって、前世紀のほゞ四〇年代から九〇年代にかけて、ロシアの先進的な思想は、これまで見たことのない野蛮で反動的なツァーリズムの圧迫のもとで、たゞしい革命理論をむさぼるように探求し、ヨーロッパとアメリカの、この分野における「最後のことば」〔最新の達成〕の一つ一つをことごとくおどろくほどの熱心さと綿密さで追及した。聞いたこともないほどの苦しみと犠牲、見たこともないような革命的英雄主義、信じられないようなエネルギーとかぎりない探求、研究、実践上の試練、失望、点検、ヨーロッパの経験との比較、の半世紀にわたる歴史によつて、ロシアはたゞ一つのたゞしい革命理論であるマルクス主義を真にたかいたかいつたのである。ツァーリズムのためにやむをえず亡命したおかげで、革命的なロシアは一

九世紀後半に、世界のどこの国にも見られないようなゆたかな国際的結びつき、革命運動の世界的な形態と理論にかんするすぐれた知識をもつにいたったのである。

他方からいって、この盤石のような理論的基礎のうえにうまれたボリシェヴィズムは、一五年間（一九〇三—一九一七年）にわたって、世界に類のないほどゆたかな経験をもった実践の歴史をへたのである。というのは、この一五年間に、これほど多くの革命的経験を積み、さまざまな運動形態、すなわち、合法的なものと非合法的なもの、平和なものと激烈なもの、地下的なものと公然たるもの、サークル的なものと大衆的なもの、議会的なものとテロリスト的なもの、急速で多様な交代をこれほど多く体験した国は、それに近いものさえなかったからである。これほど短い期間に、近代社会のあらゆる階級がおこなった闘争の形態、色あい、その方法を、これほどゆたかに集中した国はなかった。しかも、この闘争は、国がおくれているツァーリズムの圧迫の重荷をせおっていたために、とくに急速に成熟し、アメリカとヨーロッパの政治的経験のちょうど適した「最後のことば」を、とくに熱心に、成功的に習得したのである。

三 ボリシェヴィズムの歴史のおもな段階

革命の準備の年代（一九〇三—一九〇五年）。いたるところで大暴風に近いことが感じられる。あらゆる階級に醗酵と準備がある。国外では亡命者の新聞が革命の全基本問題を理論的にとりあ

ける。三つの基本的な階級、三つのおもな政治的潮流——すなわち、自由主義的「ブルジョア的、小ブルジョア的」「民主主義的（「社会民主主義的な」）また「社会革命的な」党派の看板でかくされている）、プロレタリア的「革命的——の代表者たちは、綱領と戦術との見解について、もっとも激しい戦いをおこない、きたるべき公然たる階級闘争を予期し、その準備をしている。一九〇五—一九〇七年と一九一七—一九二〇年とに大衆の武装闘争をよびおこしたすべての問題は、その芽ばえを当時の文献にたどることができる（またそうしなければならぬ）。三つのおもな党派のあいだには、もちろん、中間的な、過渡的な、中途はんばな形がいくらかもある。よりたたくは、機関紙、政党、フラクション、グループの闘争のなかで真に階級である思想的「政治的流派が結晶してゆく。各階級はきたるべき戦いのための適当な思想的「政治的武器をきたえてゆく。

革命の年代（一九〇五—一九〇七年）。すべての階級が公然と進出する。すべての綱領上の、また戦術上の見解は、大衆の行動によってためされる。ストライキ闘争は世界にいままで見られなかったような広さと鋭さをもつ。経済的ストライキは政治的ストライキに成長し、政治的ストライキは成長して蜂起に転化する。指導するプロレタリアートと、指導される、動揺している、不安定な農民層との関係は、実践的に点検される。闘争の自然成長的な発展のうちにソヴェト的組織形態が生まれる。ソヴェトの意義について当時おこなわれた論争は一九一七—一九二〇年の偉大な闘争の先駆をなしている。議会的闘争形態と非議会的闘争形態の交代、議会ボイコット戦術と議会参加戦術の交代、合法的闘争形態と非合法的闘争形態の交代、同様に、これらのものの